

1. 問題

1. 宗教的多元性をめぐる議論の蓄積と問題点

宗教間対話の制度化？ しかし、多くの問題が残されている。問題点の集約が行われていないことが最大の問題か？

2. 多元化とグローバル化とは宗教にとって、何を意味するのか。

確かに、宗教もこれらの現代の歴史的状況を規定する根本動向の影響をまぬがれ得ない。つまり、宗教にとっても決定的な問題となりうる。というのも、宗教はそれ自体社会的存在であり、社会の動的変化の外に立つことはできないからである。

留意点

(1)しかし、他方、この問題状況を思想史的に厳密に理解するには、こうした諸動向が、キリスト教成立の当初から、すでに問題化していた点に留意する必要がある。たとえば、キリスト教が展開した古代地中海世界は宗教的に多元的な状況にあったし、ローマ帝国内では、軍事、法、商業、通信・交通におけるグローバル化が進展していた。これと現代の状況との違いは、質的なものなのか、量的なものなのか。

(2)宗教と社会との関係性自体、決して単純ではない、確かに、宗教は社会的存在ではあるが、宗教には社会を超えようとする志向性が存在している。社会・世界のグローバル化に対して、宗教の側には別のあり方を選択する可能性が残されている。

3. 現代の宗教を取り巻く状況に固有な問題とは何か。

キリスト教の場合：別の救済の道の存在を正面からを見据える必要性の意識。真理探求・救済のパートナーとして他者を承認するという問題。

4. そこで、この発表では、まず、宗教的多元性あるいはグローバル化を、キリスト教のアイデンティティ(自己同一性)との観点で論じた上で、次に、宗教多元性との関わりでしばしば議論になる、宗教間対話の問題を、アジアのキリスト教というコンテクストに即して問題にしたい。そして、以上の考察から、キリスト教にとって、宗教的多元性あるいは宗教間対話が有する積極的意味を展望することにより、全体のまとめを行なう。

2. キリスト教とアイデンティティの問い

5. 多元性・歴史性におけるアイデンティティ

宗教のアイデンティティ(自己同一性)は、状況と相関して変化しつつも、保持されてきた。つまり、キリスト教のアイデンティティを考える場合、ゆるやかな自己同一性(弁証法的運動？ 家族的類似性？)とその多様な表現・現象形態に注目しなければならない。

留意点

(1)キリスト教の厳密な実体的定義は、規範性を入れずに可能か。

古典的な「キリスト教の本質」論(たとえば、ハルナック)の限界

(2)教義の問題として：教義についても、その形成・変化・解釈の多様化のプロセス全体

が問題になる。定式の固定化と解釈の幅をどのように理論的に考えるのか。

この際、教義に関する中心(アイデンティティの核)と周辺の区別は有効か？

教義についての解釈の幅はどのように評価できるのか？

6. 自己同一性が状況適応性との相関性において規定されるということは、現代神学においてかなり広範に共有されている問題意識である。

ティリッヒ: 状況 - メッセージ(相関)

モルトマン: 状況適応性 - 自己同一性(二重の危機)

自己同一性の危機は、同時に状況適応性の危機である。したがって、現代の宗教的多元化やグローバル化に適応できないとき、キリスト教は自己同一性においても危機に直面する。しかし、この問題設定は一般化可能か？

7. 近代以降(とくに現代)のキリスト教思想の特徴:

伝統的な神学的問題についての議論(創造論、キリスト論、救済論、終末論、三位一体論などの一次的な問題のレベル)に対して、そもそも何が真性の神学的問題であり、それを論じるための適切な方法あるいは議論の基準が何であるのか、という二次的レベルの問題が、前面に表れてくる。

その背後には、神学の理論構成には複数の可能なあり方が可能であるとの意識が存在する。神学的な問いとは何であるか自体がもはや自明ではない。キリスト教以外に救済の道が可能であるとの議論を組み込んだキリスト教神学の定式化の可能性が問われている。

8. 多元性・多様性に対して、統一性を強化しようという意識が、バランスをとっている。

西欧近代のキリスト教思想を規定している問いは、教派的な多元性のもつ否定的側面の自覚とその克服の試みである。

(1) 西欧近代のキリスト教が直面した多元性の問題、つまり、教派の多元性の問題は、宗教戦争に表れたように、否定的な側面を強く有している。

(2) エキュメニズムによる対立克服の試み

宗教的多元性を分析するモデルとしてのエキュメニズム。

教派的な多様性から、教会の一致の回復の試みの延長に、宗教的な多元性を位置づけることの可能性が考えられる。しかし、次の点に留意する必要がある。

9. エキュメニズムに関連した留意点:

教派の多元性と宗教的多元性の問題とは、質的に異なる。

エキュメニズムは、教派間対話には一定の成果は上げられているが、宗教間対話は、期待したほど進展していない、というのは、両者の質的相違を視野に入れれば、必ずしも不思議ではない。

10. では、エキュメニズムの目指す「一致」とは何か。

この一致とは、一元化・単一化、あるいは今回問題になっているグローバル化を意味するのだろうか。そもそも、グローバル化自体が、単なる単一化・一元化ではなく、ローカルなコミュニケーションを促進する可能性を併せ持っている(情報化の効果の両面)。これと同様に、キリスト教が模索する一致とは、単一化・一元化ではない、いわば、多様性を含んだ一致であると、考え得るのではないだろうか。

確かに、キリスト教には、古代から近代に至るまで、一元化・単一化を目指す顕著な傾向が見いだされる(マタイ28:16-20の解釈。排他主義あるいは包括主義として)。しかし、エキュメニズム

は、こうした一元化による一致が不可能あるいは不健全であるとの認識から出発している(一元化モデルが挫折した以降の問題状況)。

さらに言えば、そもそもキリスト教は、その出発点に、この多様性に基づく一致のモデルとして解釈可能な、ペンテコステの出来事をもっている(ペンテコステ・モデル)。バベルの塔以降の言語の混乱は、特定の言語による帝国主義的支配(統一言語)によって、收拾されるのではなく、多様な言語の存在を前提としたコミュニケーションによって解決される。これは、グローバル化の問題に関わる。

11. おそらく、グローバル化に関して確認すべきことは、諸宗教の共存状況で、標準化すべきものと、標準化しないものとを区別することではないだろうか。

標準化するもの:対話のルール、宗教的寛容・政教分離(?)

標準化しないもの:アイデンティティの核 = 個性(伝統・伝承と解釈)

この区別自体が対話において確定されるべきものであり、ルールの明確化と対話の進展とは一つのプロセスの中で、漸進的に形作られることになるのであろう。

12. 聖書の関連テキスト

マタイによる福音書の28章(一元化・単一化志向?)

16さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。17 そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。18 イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。19だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、20あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」使徒言行録の2章(多様性における一致)

1 五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、2 突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。3 そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。4すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。5さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、6 この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。

3. アジアの宗教的状况と宗教間対話

13. 問いとしての宗教間対話 = 「対話は自明ではない」

最初に述べたように、宗教間対話はすでにかかなりの長い実践の蓄積と理論的取り組みを有している。しかし、それらを批判的に総括しつつ、しばしば主張されるのは、宗教間対話は困難である、あるいは不要である、あるいは宗教間において生じた問題の解決にとって重要ではない(有効に機能していない)、といった見解である。

こうした議論は、「対話は自明ではない」という命題に集約できるのではないだろうか。実際、対話とは何か(宗教間なのか、あるいは宗教者間なのか)、対話はいかなる条件の下で可能になるのか(健全な仕方)、対話は何を目指すのか、そしてそもそも、諸宗教は対話の必要性を自覚しているのか。いずれの問いも、これまでの多くの論者の努力にもかかわらず、いまだ十分な結論を得ていないように思われる。対話が進まないことの根底に、他者への無関心が在るといえるのは、言い過ぎであろうか。

たとえば、キリスト教においても、個々の宗教共同体(各個教会)のレベルにおいてその状況を見ると、他者への関心は想像以上に低いのが実情のように思われる(教団レベルでの対話スローガンと各個教会レベルの無関心とのギャップ)。

しかし、アジアのキリスト教の対話にむけた多くの創造的な試みを見ると、宗教間対話について、必ずしも悲観的な結論に終始する必要はないように思われる。

14. アジア・キリスト教の文脈から(新しいキリスト教に向けた実験)

「状況 - メッセージ」の新しい相関を生み出す努力が、宗教的多元性の状況下で様々に試みられている。宗教的多元性のもとにおけるキリスト教の新しい可能性については、アジアのキリスト教思想に大きな期待がかけられている。少なくとも、これは、キリスト教思想における欧米一極集中からの脱却のチャンスとなるかもしれない。

15. 宗教間対話の前提としての共通課題の自覚とそのポイント

(1)他者への無関心を超えて

(2)宗教間対話などと言う前に、同じ世界・社会において問題を共有しつつ共に生きていくことの自覚が必要(課題の共有と責任の自覚。共に生きる世界のヴィジョン)

(3)宗教間対話の基礎としての宗教内対話(教派・宗派間対話 自らの宗教としての自己同一性は何か)、宗教間対話のコンテキストとしての世俗との対話

(4)伝統的な諸宗教にとって、現在問題なのは、宗教間対話よりも、むしろ、世俗的な共同体・集団や世俗的価値観との対話ではないだろうか。宗教間対話は、諸宗教サークル内部の閉じた場で行われるのではなく、世俗へ開かれたものとして行われる必要がある(伝統的な諸宗教にとっては、近代化・世俗化の状況といかに向き合うかが、最重要の問題ではないか。グローバル化もこのコンテキストにあると言えないだろうか)。

16. アジアの状況から:共通課題としての貧困と環境

この矛盾した課題(単純化して言えば、貧困の解決には経済成長が必要であるが、経済成長は環境に大きな負荷をかけることになる)にどのように対処するのか。共通の未来をどのように共に構築して行くのか。まさに、ここに対話の必要性(それぞれの諸宗教にとって、そして社会にとって)がある

4. むすび

17. 自己理解と他者理解との相互媒介性

直接的自己意識は出発点であるが到達点ではない。出発点としての自己意識は、さらに深められねばならない。条件が整うならば、類似と相違の認識は、相互に媒介し合うことによって、深められる。

18. 伝統的な教義の解釈の枠内で十分なのか、もっと根本的な変革が必要なのか。

解釈の逸脱は、自己同一性を突き崩すものとなるか(アイデンティティから逸脱した解釈)。新しい宗教か、あるいは宗教改革か? おそらく、これは、具体的な実践の中でのみ、答え得る問題であろう。

19. 宗教間対話は、21世紀の歴史的状況におけるキリスト教の新しい自己同一性の探求の具体的な場となり得るか。日本においては?

<文献・拙論>

- 芦名定道 「第四章 ティリッヒと宗教の神学」(『ティリッヒと現代宗教論』
北樹出版、1994年、197-246頁)
- 「キリスト教と東アジアの近代化」(『アジア研究所紀要』
第25号、1998年、亜細亜大学アジア研究所)
- 「「宗教の神学」の現状と課題」(『宗教学会報』No. 11、
2000年、大谷大学宗教学会)
- 「南アジアのキリスト教の諸問題」(『アジア研究所紀要』
第27号、2001年、亜細亜大学アジア研究所)
- 「キリスト教思想と宗教的多元性」(『宗教研究』特集：近代・ポスト近代と
宗教的多元性 第75巻、329号、2001年9月)